

親鸞さまの

【本文】

みだちがんかいすい
弥陀の智願海 水に

たりき しんすい
他力の信 水入りぬれば

しんじつほうど
真 実報土のならひにて

ぼんのうぼだいいちみ
煩 悩菩提一味なり

【意識】

阿弥陀様の智慧に基づいた願い、「全ての人を極楽浄土で仏に成らせたが、この阿弥陀を依り所になさい」というお心があります。これは例えるならば、大いなる海のようにです。

川の水、信心(仰るように、依り所にいたしますと)いう心)の水は、この海に入ると、

海と川の水が潮の味一つに成っていくように、阿弥陀様と極楽浄土が具(そな)えた徳によつて、

煩惱を抱えたこのままで仏様に成らせて頂くのです。

【私の味わい】

「目に入れても痛くない」というのは、たとえ痛みを伴っても、愛して止まない人の気持ちを表現しているのでしょう。そこにはそもそも別々の人と人が、まるで一体に成っているかのように思えます。放っておけない、助けずにはおれない関係です。

この一方で、いつからか「自己責任」という言葉がよく聞かれるようになりました。自分の行為、結果を自分で引き受けるのはその通りかもしれませんが、しかし、これももし親子の間で発せられたらどうでしょう。子供の覚束(おぼつか)ないところ、教えた方がいいこと、こういったことを面倒を見ずに放っておく関係は本当に親子関係と呼べるのでしょうか。どこか他人のようなすきま風を感じます。

阿弥陀様の私たちを見る智慧の眼は、まさに「目に入れても痛くない」ほどの眼です。成仏する見込みのない行く末を放っておけないのです。助けずにはおれないのです。

水たまりは、海のような潮の味がするものでしょうか。違いますね。何処にもつながらない水たまりは、いつしか無くなってやがて存在さえ忘れられてしまうものでしょう。しかし、川だったらどうでしょう。その流れはやがて海に注ぎ込んで潮の味そのものに成っていきます。そして、後世にも名の有る川として人の心に残っていきます。

阿弥陀様は、水たまりのようなこの私を、海へと注ぐ川と成して下さった。潮の味そのものに、仏様に、さとりそのものへと成す道筋を定めて下さった。だからこそ、偏ひとえに阿弥陀様を依り所として「お陰様です」と合掌感謝させて頂くのです。(悠水)